

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子 芝浦三丁目保育園
施設所在地	東京都港区芝浦3-20-2 山楽ビル2階・3階
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

運動遊び「安田式体育遊び」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

日頃から室内や戸外で運動遊びを取り組んでいる。園の設備として面積が広いわけではないが、子どもたちがやりたい運動をスタッフが汲み取ったり、保育者も一緒になって楽しみ活動に促すことで日常的に遊びを通して運動能力の向上に励んでいる。安田式体育遊びは日々の中で子どもたちのやってみたいという気持ちに寄り添いながら、体力向上だけでなく、安全能力を高めるプログラムとして自園の子どもたちに適した運動遊びとなっているため設定をした。

2. 活動スケジュール

【子どもの姿・保育士の願いからテーマを設定する】

子どもたちは体を動かすのが大好き。狭い室内環境の中で子どもたちに運動遊びの環境を提供したいということから運動遊びにテーマを設定した。

【専門講師に環境を確認してもらう】

6月4日 安田式体育遊びの講師が来園。各保育室の環境を見てもらい講師と保育士が一緒になって今後の運動遊びについてのテーマを相談する。同時に安田式体育遊びの動画コンテンツである”がんばりまめ.com”を視聴し、子どもたちの運動遊びの指導方法についての理解をスタッフが深める。

【室内で運動遊びを開始する】

9月10日 新しい運動遊びの用具が納品され使用方法、指導方法を専門講師から学ぶ。
翌日から週1回のペースで保育士による室内で運動遊びの時間を定期的に設ける。

【専門講師に指導方法を学ぶ】

11月14日安田式体育講師が来園。日ごろの指導の悩みを相談。
各クラスと一緒にしてもらい、子どもたちと一緒に取り組みながら保育者にアドバイスを頂く。午後には活動の様子をフィードバックをもらい、保育者の日頃の疑問に答えていただいた。
翌日から指導方法のアドバイスをもとに、保育士が運動遊びの方法をブラッシュアップして、活動を継続していった。

【運動遊びの用具を追加する】

運動遊びが深まるように、各クラスの子どもたちに合った運動遊びの用具を追加注文し、新しい用具を加え、運動遊びの頻度を増やし、運動遊びを充実させる。

【専門講師に指導方法を学ぶ】

1月28日安田式体育講師が来園。運動遊びの頻度を増やすことでスタッフの中で子どもたちへの運動遊びの疑問がたくさん出てきた。その悩みを専門講師にアドバイスいただき、次の運動遊びの工夫につなげていった。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

大型マット、平均台、エアーマット、自動空気入れ、ジャングルジム、ソフトブロック、トランポリン、竹馬、ポックリ、バランスボード、安田式の講師料、がんばりまめ.com

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【専門講師に環境を確認してもらう】

安田式体育遊びを学び、保育者の視点を統一する：保育者が安田式体育遊びはどのような内容なのか講師による子どもたちへの実際の指導の様子を学び、自園の環境の中で子どもたちが主体的に体育遊びが取り組めるように探求していく方針を園全体で共有した。

【室内で運動遊びを開始する】

環境づくり：マットや平均台など、安田式体育遊びの用具を準備し観察をする。各クラス週一回は取り組めるように計画していく。

遊びたい気持ちは強いが各々好きな場所で運動することが見られたため、コーナーごとに保育者を配置し、ハイタッチやスキンシップを取ることに重点をおく。自然とサーキット遊びの流れを理解し始める。

【専門講師に指導方法を学ぶ】

子どもたちも環境づくり：毎週繰り返し遊ぶことで、どの用具で運動したいのか子どもたちの考えを取り入れながらサーキットを設定し、運動がより深まり探求できるようにする。また友達と関わりながら運動をしようとする姿を観察する。

取り組んだことをkidsDiaryにて振り返りとして園内に共有。また、各階にドキュメンテーションを掲示して発信する。

【運動遊びの用具を追加する】

子どもたちが運動遊びを継続していく中で、狭い室内で子どもたちの活動の広がりや運動遊びの環境にギャップがあるということに各クラス担当が気づき、新しい遊具を購入した。

【専門講師に指導方法を学ぶ】

毎日繰り返し指導する中で、各クラス担当が体育遊びについて質問したいことが出てくる。安田式体育遊びの講師に来園頂き、時間いっぱい、日ごろの指導についての疑問、体育遊びの環境と現在の環境とのギャップなど相談することで、次の活動につながる目標を設定することができた。

【子どもの探究】

担当が日々の体育遊びを観察し、子どもたちに合ったねらいや目標を明確にしていくことで、子どもたちの意欲にも繋がり、自主的に動きや遊びを保育者に提案してどんどん楽しく体育遊びに取り組む姿が見られるようになった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

・やりたい気持ちの芽生え：初めての取り組みの際には講師も一緒だったこともあり、子どもたちは安田式体育遊びの用具や講師の楽しい雰囲気に興味を示す。サーキットの回り方を重視しながら、肯定的な言葉かけの中で【くまさん歩き】【マットジャンプ】など基本的な動きを組み合わせる。最初は見守っていた子ども保育者や友達と一緒に遊んで遊び「楽しい」「またやりたい」と繰り返し遊びたい気持ちがみられる。遊ぶ中で夢中になり友達との距離感が近くなって危ない様子が見られたため、保育者がコーナーに配置し、ハイタッチしながらサーキットを自然と回れるように配慮すると段々と子どもたちも友だちの動きを見ながら身体を動かすことができるようになる。

・新しい用具への興味：習慣的に身体を動かすことが身に付き、より体育遊びを発展させるために子どもたちの興味のある新しい用具を購入した。ルールや使用方法など安田式体育遊びで定期的に取り組んでいたため、自然と理解し積極的に遊ぶことができるようになっていた。1歳児では「さん、に一、いち…じゃんぷ」と普段保育者が伝えるような声掛けを自主的に話したり、平均台では保育者と手を繋いで渡るとコツが掴めてきたようで手を繋がないでも進めるようになっていた。「じぶんでできるよ」「せんせいみて」などと話しながら楽しむ姿があった。

・一緒にやってみよう：継続的に取り組む中で、保育者の声掛けがなくても遊びの流れを理解しながら取り組めるようになってくる。流れを理解することで、友達がどんな動きをしようとしているのか子どもたちなりに周りをみながら待つことや、遊ぶことができるようになってくる。また友達の様子を見よう見まねで真似っこしようとする様子が見られ、「こういう動きはどうか？」「手をつないでみたらいいんじゃない？」「一緒にやろう」と子どもたちが動きを考えて、一緒に遊びを展開する様子が見られるようになってくる。また、異年齢で遊ぶことによって『あんな風にやってみよう』と刺激され自然と動きを吸収し、模倣しながら遊びが深まることができるようになっていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・最初のころは保育者の動きを模倣する段階だったが、マット遊びを通して体の使い方が多様になり、自分から次第にリズムに合わせて膝の曲げ伸ばしや両足跳びができるようになった。また、バランスボード等の活用により、体幹やバランス感覚も養われ、転倒時に反射的に手をつく動きが見られるようになり、自分の身を守る力が身についてきた。

・室内でもマットや平均台を用いた多様な動き（バランス・全身運動）を十分に確保でき、子どもの運動能力や挑戦心の高まりを実感した。活動後の「またやりたい」という満足感に満ちた表情から、充実した活動であったことが理解できた。走るだけでなく「跳ぶ」「転がる」といった新たな動きに積極的に挑戦する姿が見られ、マットをトンネルやバイク、電車に見立てるなど、遊具を自分なりに遊びを創造・展開させる力が育っている。

・保育者が全てを説明するのではなく、期待感を高める遊びの名前や最小限の注意点に留めたことで、子どもたちが自発的に遊びを工夫することができるようになった。友だちの遊ぶ様子に刺激を受け、真似をしたり、一度途切れた集中力を再度高めて遊びの輪に加わったりする姿が見られた。友達や異年齢の児への関心が、自身の遊びを豊かにする原動力となっている。

・ルールを守ることが難しい場面では、否定的な指摘ではなく、望ましい姿を見せている他児への肯定的な声掛け（「〇〇ちゃん、かっこいいね」等）を意識した。これにより、子ども自身が周囲に目を向け、楽しみながら自然とルールを理解し、守ろうとする姿に繋げることができた。大人が遊びのルールを強制するのではなく、集団の中でのルール（規範意識）が内面化され、遊びの楽しさを維持するために必要なものとして、順番やルートを自発的に守る姿が見られるようになった。

・今後は継続的に体育遊びが行えるように短い時間で取り組む回数を増やしたり、室内だけではなく慣れている公園でも様々な動きに挑戦しながら遊びを豊かにしていきたい。また、異年齢で体育遊びを行い、「やってみたい」と意欲的な気持ちを育んでいきたいと感じる。